「コミュ力」高める遊び紹介

全特協が協議会　佐藤・植草学園短大教授が講演

全国特別支援学級・通級指導教室設置学校長協会（全特協、会長＝喜多好一・東京都江東区立豊洲北小学校統括校長）は4日、オンライン形式で全国研究協議会を開催した。植草学園短期大学の佐藤慎二教授による記念講演では、図工室を使った「サーキット遊び」を紹介。児童が仲間と共に体を使って課題をこなしていくもので、コミュニケーション能力の向上を目指す実践だと位置付けた。

喜多会長はあいさつで、特別支援学級や通級を設置する1万7500校のうち約60％の校長が全特協に加盟したと説明した。「小・中学校では、学校全体の課題として特別支援教育が取り組まれるよう、特別支援教育に関する目標を適切に設定し、教員の育成だけでなく、特別支援教育を推進する校長の在り方にも目が向けられている」と訴えた。

記念講演では、佐藤教授が「共生社会の形成に向けた『特別』ではない支援教育」をテーマとして、特別支援学級や通級での実践例を紹介した。

佐藤教授は学習指導要領の方向性について、「実社会や実生活で生かせる力を身に付けることを重視しており、通常の教育も含めて生活のための学校教育という原点回帰が必要」と指摘した。

一例としてドッジボールの場面を挙げた。子どもたちは足し算や引き算を自然に使いながら内野と外野の選手の人数を計算する。こうした場面を通して「できる」という実感が得やすくなるという。

コミュニケーション力を高める実践例の一つとして、小学校での自閉症・情緒障害学級と知的障害特別支援学級の合同の「サーキット遊び」を紹介した。

実践に取り組んだ小学校では、図工室に滑り台、迷路―など六つの課題を設けた。課題をこなすと、メダルをもらえる仕掛け。課題とした遊具は図工、総合的な学習の時間、生活科で児童自身が制作した。子どもたちに「楽しい活動」と意識させるために、担当教員が「2人で遊ぶと楽しいよ」といった声掛けを意識した。